慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本霊異記下巻第一話の考察 : 某禅師の死について
Sub Title	On the first story of Nihon-Ryoiki, Vol. II
Author	辻, 英子(Tsuji, Hideko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.99- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本霊異記下巻第一話の考察

――某禅師の死について――

辻　英子

霊異記のこの話は、後の「今昔物語集」巻第十二「僧死後、舌残在山誦法花語第卅一」に引かれ、より簡略化された形としては「元亨釈書」巻二十九拾異志にも採られている。直接関係を有するものは以上にとゞまるのであるが、類話を拾ってみると、同じく、今昔物語集巻第七「震旦法花持者、現舌語第十四」、及び、巻第十三、「一叡持経者、聞屍骸読誦語第十一」があるが、前者については、出典として、「攷證今昔物語集」及び、「日本古典文学大系」が、「三宝感応要略録巻中(33)（原拠は梁高僧伝）」を挙げ、類話として各書が、「法苑珠林巻十八敬法篇感応縁」(註1)、「法華伝記巻四斎幷州誦経舌篇」を採りあげ、後者については、両書が出典として「日本法華験記」を挙げ、「攷證今昔物語集」では類話として「古今著聞集巻十五宿執篇」を提示している。

以上が管見に入った限りの同類の話であり、それに関する従来の――出典研究の段階にとどまる――研究状態である。

1

本話は、法華経の信奉に篤かった僧が死人で髑髏と化してからも、舌だけは腐ちずに、生きているように経を誦しつゞけたというの

である。こゝで考えてみたいのは、僧の死についてゞある。梗概を示すと、

永興禅師（続日本紀宝亀三年三月の条にあり、十禅師の一人）のもとで一年余を送った某禅師は、別れ際に縄床を永興禅師におくり、一方、禅師から施された糯の干飯粉は途中まで見送ってくれた優婆塞二人に法華経や鉢とともに与えてしまい、自分は、たゞ麻縄二十尋と水瓶一口だけを持って去る。すなわち、僧は露命をつなぐ糧となるべきものは何ひとつ所有たず入山した。二年を経て熊野の村人が樹を伐りに山に入るとどこからか、法華誦持の声が聞こえてくる。二年半目に永興自ら山に入りその声の主をみつけたところが、一つの屍骨――麻縄で両足を繋ぎ、巌に身を懸けて死んだ――があるだけだった。三年経って再び永興が出かけて往き骨を拾おうとすると、舌だけは儼然と生きたもののようであることに驚く。これは、経を誦し、功を積んだ験徳であり、話の末を、「貴きかな禅師、血肉の身を受け、常に法華を誦し、大乗の験を得たり。身を投げ曝して、髑髏の中、舌を著けて爛れず。これ明に聖にして凡ならず」と賛を以て結んでいる。この話は偶々、舌だけが朽ちずにあったという自然の創り出したものへの驚嘆、稀有の不思議としての興味から語り伝えられたものなのか。僧の死は、単に、当時、あまりにありふれた行路病死に過ぎないものなのであろうか。これらの疑問にこたえてくれるものを我が国の説話文学史上にもとめようとするとき、その資料は極めて乏しい。前掲、今昔物語集の類話二種のうち、一つ――巻第七第十四話――は、もともと支那の話であり、弘賛法華伝にも納められている。(註2) 同伝には、法華信仰に篤かった人等の話として同類のものを数多く伝えていること、推測的な表現が許されるなら、霊異記の一話は我が国の土壌にその同話をとどめず、ほつねんと咲いた異色の存在であることなどから、その母胎は他国であるとの想像は容易なのであるが、そうした意味からも、こゝで、唐僧恵祥の手に成った彼の地の弘賛法華伝にあたってみるのは興味深いことであろう。

2

弘賛法華伝が支那で何時成ったかは詳しいことは解らないが、奥書によれば、我が国、保安元年（一一二〇）に太宰府で書写し畢った経巻の一つである。このなかに、次のような話がある。

巻第七

巻第七

釈慧向。俗姓劉氏。彭城人。甚有道素。衆所知識。省事務。唯誦法華。来到江都県。寄故亭村住。年一百二歳。初無疾病。而忽云。貧道当行。與檀越別。於是端坐而終。村人輿出林間。未敢埋殯。経一七日。其屍忽自仰臥。初申後屈已合掌。了不爛壊。転久但乾辟而已。村人埋之於銅山之側。採樵人。時有聞誦経声。不知的在何処。揚州総管府司馬趙元恪。因公行次。従向墓傍過。見一茎蓮華。生於陸地。怪而訪之。村人云。是慧向師之塚。此僧生存。誦法華経。或当是其所致。乃堀而視之。唯白骨口中。其舌如舊。紅赤柔軟。都不変壊。従此舌根。生此蓮花。因遂聞奏。表其霊異。又起七層塼塔。塔今見在。又此丘尼法潤。姓陳。円陽人也。住三昧寺。誦法華経。甚有道行。死後。屍陀林野。以施蟲獣。経停百許日。蟲鳥噉食都尽。唯舌与心。宛然俱存。舌猶赤色。而心稍如黒耳。其縁家子弟。乃収葬起塔。

（大正蔵　巻五十一）

重複の感があるが比較の便宜上要約を示すと、

日本霊異記　　弘賛法華伝

○紀伊国牟婁郡熊野村有二永興禅師一。時人貴二其行一故、美二称菩薩一。爾時有二一禅師一、来二於菩薩所一。

○僧常誦二持法華大乗一、以之為レ業。

○釈慧向。俗姓劉氏。彭城人。来到江都県。寄故亭村住。

○唯誦法華。

○歴二一年余一、而思二別去一、敬二礼禅師一、而語之曰、今者罷退欲二居(ヤシ)レ山一、踰二於伊勢国一、

○年一百二歳。初無疾病。而忽云。貧道当行。與檀越別。

○遥二之二年一、熊野村人、至二于熊野河上之山一、伐レ樹作レ船。聞之有レ音、誦二法花経一。

○於是端坐而終。未敢埋殯。経一七日。了不爛壊。村人埋之於銅山之側。

○後歴二半年一、為レ引レ船入レ山。聞之読レ経音。猶不レ止。怪二白禅師一。

○採樵人。時有聞誦経声。不知的在何処。

○禅師怪、往而聞有レ実。尋求見之、有二一屍骨一。

○揚州総管府司馬趙元恪。因公行次。従向墓傍過。見一茎蓮華。生於陸地。

○然歴三三年一、永興復往、見二髑髏一者、至二于三年一、其舌不レ腐、宛然生有。

○怪而訪之。村人云。是慧向師之塚。乃堀而視之。唯白骨口中。其舌如蕉。紅赤柔軟。都不変壊。従此舌根。生此蓮花。因遂聞奏。表其霊異。又起七層塼塔。塔今見在。

○（別話として、吉野金峯山の僧の話。）

○（別話として、此丘尼法潤の話。）

これは、我が国の残存文献にこの類の話を伝えない今日、霊異記の話の背景を推測する一つの示唆を与えてくれるものでもあろう。他に、巻第六「釈志湛」、巻第七「斉文成」・「釈法慧」・「清信士王」・「釈智業」、巻第八「釈慧頭」・「史阿誓」・「史崇」・「釈弘照」なども参考となるものであろう。紙幅の関係上詳しくは述べられないが、五世紀から七世紀に亘るこれらの話は、ほぼ年代順に列記されており、説話の発展過程を知るうえにも役立つであろう。いずれも、法華経の信仰に篤かった人の舌が死後までも生きながらえて誦経したという点では一致しているが、表現に於ては、各々が特徴をもって語られている。そのいくつかを部分的に例示してみると、

○ 後十年。妻已重発。唯舌鮮好。余皆朽尽。（史阿誓）

○ 死後十余年。其家将欲改葬。見其骨肉。鎖散略尽。唯舌如生。（奏州権氏女）

○ 身死之後。以火焼身。乃於灰中。得舌一枚。儼然不壊。道俗莫不称歎。（釈道正）

○ 後経年余。筋肉都尽。唯舌形顔色。興常人不異。或有疑駭之者。乃火焼不変。斧斫無損。遠近見聞。信倍恒百。（日イ）（史崇）

こゝには、改葬の際など屍に接したとき、生々しい舌を見出した人々の驚き、素朴な驚愕の念がみられ、次いで、「史崇」、「道正」の話などには、すでに、人々の屍に対する崇拝にも似た気持が生れつゝあったことを語るものであろう。こゝで、「斉文成」の話をやゝ詳しく紹介してみよう。

并州の東、看山の側から発掘された人脣は鮮かで紅赤色をしていた。人皆、これを見て怪しみ帝王に此の由を奏上する。一沙門が帝に奏して言うのには、「法華経を読誦する人の六根は壊ちることがない。これは、そうした功徳によって霊験を顕わした舌である」と。帝王は、此の事を聞いて貴ばれ、その舌を浄所に祀り、供養した。舌はその後も、まるで経を誦しているかのように鼓動しつづけた。重ねての不思議に帝の詔によって、舌は石棺に納められ、塔室に安置されたという。次に、「釈志湛」では、一聖が涅槃に入るという日には梁武帝をはじめ、都の道俗こぞってこの告を聞き、遥かに聖のいる銜草寺にむかって礼拝する。その後に付加えられている西天笠の僧及び、范陽五候寺の僧の二つの話などから、当時すでに改葬のおりにできるだけ形骸を損わずに保存し、腐蝕を防ぐため石灰を塗りこめ、廟に安置する風習があったらしい。また、釈法進は、死後、茶毗に付し、七日間焼いたが、舌だけは、爛わず、羅什も外国の法に依り死後火葬にしたが、舌だけは壊ちなかった。あるいは、曇光の形骸の朽ちなかったという。少しくどいようではあるがこの種の話を次に掲示してみよう。

釈法進。或曰二道進一。或曰二法迎一。姓唐。涼州張掖人。幼而精苦習誦。有二超邁之徳一。為二沮渠蒙遜一所レ重。遜卒子景環為二胡寇一所レ破。間レ進曰。今欲レ転二略高昌一為レ可レ剋不。進曰必捷。但憂二炎餓一耳。迴レ軍即定。後三年景環卒。弟安周続立。是歳飢荒死者無レ限。周既事レ進。進屢従求乞以賑二貧餓一。国蓄稍竭。進不二復求一。迺浄洗浴取二刀監一。至二深窮窟餓人所レ聚之処一。次第授以三二帰一。便掛二衣鉢一著レ樹。投二身餓者一前云。施汝共食。衆雖二飢困一猶義不レ忍レ受。進即自割レ肉和(柱イ)レ塩以啖レ之。両股肉尽心悶不レ能二自割一。因語二餓人一云。汝取二我皮肉一猶足二数日一。若王使来必当二将去一。但取蔵レ之。餓者悲悼無二能取者一。須臾弟子来至。王人復看(至イ)。挙国奔赴号叫相属。因興レ之還レ宮。周勅以二三百斛麦一以施二餓(飢イ)者一。別発二倉廩一以賑二貧民一。至二明晨一乃絶。出二城北闍維之一。烟炎衝レ天七日乃歇。屍骸都尽唯舌不レ爛。即於二其処一起二塔三層一。樹二碑于右一。進弟子僧遵。姓趙。高昌人。善二十誦律一。疏食節行。誦二法華勝鬘金剛波(般イ)若一。又篤(又イ)二厲門人一常懺悔為レ業。

（高僧伝巻第十二　大正蔵五〇　四〇四頁　傍線稿者）

鳩摩羅什

鳩摩羅什。此云二童寿一。天竺人也。家世国相。什祖父達多。倜儻不レ群名重二於国一。父鳩摩炎。聰明有二懿節一。将嗣二相位一。乃辞避出家。東度二葱嶺一。――中略――願凡所二宣訳一伝二流後世一咸共弘通。今於二衆前一発レ誠実誓。若所レ伝無レ謬者。当レ使二焚レ身之後舌不二燋爛一。以二偽秦弘始十一年八月二十日一。卒二于長安一。是歳晋義熙。五年也。即於二逍遥園一依二外国法一以レ火焚屍。薪滅形砕唯舌不レ灰。――下略。

（高僧伝巻第二　大正蔵五〇　三三二頁）

帛僧光。或云二曇光一。未レ詳何二許人一。少習二禅業一。晉永初遊二于江東一投二剡之石城山一。――中略――光毎入定輒七日不レ起。処レ山五十三載。春秋一百一十歳。晉太元(三七六)之末。以レ衣蒙レ頭安坐而卒。衆僧咸謂依レ常入定。過二七日一後怪二其不一レ起。乃共看レ之顔色如レ常。唯鼻中無レ気。神遷雖レ久而形骸不レ朽。至二宋孝建二年(四五五)一。郭鴻任レ剡入レ山礼拝。試以二如意一撥レ胸。颯然風起衣服(消イ)銷

散。唯白骨在焉。鴻大愧懼収之於室(于イ)。以塼畳其外而泥之。画其形像于今尚存。

(高僧伝巻第十一 大正蔵五〇 三九五頁)

釈法緒。姓混。高昌人。徳行清謹蔬食修禅。後入蜀於劉師塚間頭陀山谷。虎兕不傷。誦法華維摩金光明。常処石室中且禅且誦。盛夏於室中捨命。七日不臭。屍左側有香。経旬乃歇。毎夕放(歇イ)光照徹数里。村人即於屍上為起塚塔焉。

(高僧伝巻第十一 大正蔵五〇 三九六頁)

唐洛京大遍空寺実叉難陀伝

釈実叉難陀。一云施乞叉難陀。華言学喜。葱嶺北于闐(遁イ)人也。——中略——以景雲元年十月十二日。右脅累足而終。春秋五十九歳。有詔聴依外国法葬。十一月十二日於開遠門外古然燈台焚之。薪尽火滅其舌猶存。十二月二十三日。門人悲智勅使哥舒道元。送其余骸及斯霊舌還帰于闐。起塔供養。後人復於茶(茶イ)毘之所起七層塔。土俗号為華厳三蔵塔焉。

(宋高僧伝巻第二 大正蔵五〇 七一八頁)

後唐明州国寧寺𤔲光伝

釈𤔲光。字登封。姓呉氏。永嘉人也。唐史官左庶子兢之裔孫也。幼捨家於陶山寺剃度。——中略——時四明太守仰詮素重光高蹈。躬為喪主理命令葬。後三年准西域焚之発棺儼若生相。髭髪爪皆長。茶毘収舎利起小塔焉。則後唐長興中也。

(宋高僧巻伝第三十 大正蔵五〇 八九八頁)

釈遺俗。不知何許人(・ナシイ)。以唐運初開(閑イ)遊止雍州醴泉県南美泉郷陽陸家(湯イ)。鎮常供養清倹寡慾(欲イ)。惟誦法華為業。昼夜相係乃数千遍以貞観初。因疾将終。遺嘱友人慧廓曰。比雖誦経意望霊験以生蒙俗信向之善。若身死後。不須棺(・・二字ナシイ)盛露骸埋之。十載可為発出。舌根必爛知無受持。若猶存在。当告道俗為起一塔以示感霊。言訖而終。遂依埋葬。至貞観十一年。廓与諸知故就墓発之。身肉都鎖惟舌不朽。一県士女咸共仰戴(載イ)。誦持之流又倍恒度。乃函盛其舌。於陽陸村北甘谷南岸(崖イ)為建甎塔。識者尊

厳弥隆ニ信敬ニ誦読更甚。又京城西南豊谷郷福水南史村史呵擔者。少懐ニ善念ニ。常誦ニ法華ニ行ニ安楽行ニ。慈悲(悲忍イ)在レ意不乗ニ蓄産ニ。虚約為レ心名霑ニ令史ニ。往ニ還京省ニ以習ニ誦相ニ。仍恐下路逢ニ相識ニ。人事喧涼便廃ニ所誦ニ。故其所レ行必小径左道低レ気恪レ顔縁念相続。初不レ告レ倦。及レ終之時。感ニ異香気充ニ於村曲ニ。親疎同怪遂埋ニ殯之ニ。爾後十年妻亡。乃発レ屍出。舌根鮮(相イ)明余並朽尽。乃別標顕葬。

（続高僧伝巻第二十八 大正茂五〇 六九〇頁）

唐終南豹林谷沙門釈会通伝

（〇略）荊州有ニ比丘尼姉妹ニ。同誦ニ法花ニ。深厭ニ形器ニ。倶欲レ捨レ身。節ニ約衣食ニ。飲ニ崇苦行ニ。服ニ諸香油ニ。漸断ニ粒食ニ。後頓絶レ穀。惟嗽ニ香密ニ。精力所レ被神志鮮爽。周告ニ道俗ニ。剋レ日焼レ身。以レ貞観三年二月八日ニ。於ニ荊州大街ニ置ニ二高座ニ。乃以ニ蠟布纏身至レ頂。惟出ニ面目ニ。衆聚如レ山。歌讃雲会。誦至ニ焼処ニ。其姉先以レ火(炷イ)柱ニ妹頂ニ。請妹又以レ火柱ニ姉頂ニ。清夜両炬一時同耀。焰下至レ眼。声相転明。漸下ニ鼻口ニ方乃歇滅。恰至ニ明晨ニ。合坐洞挙。一時火花。骸骨摧朽。二舌倶存。合衆欣嗟。為起ニ高塔ニ。――下略――

（続高僧伝巻第二十七 大正五〇 六八四頁）

これらの話を通じて言えることは、死をとおしての奇異な現象は恐怖、忌み嫌うべきものから、人々にとって犯しがたい確かなもの、神秘への畏敬の対象へと変りつゝあったのではなかろうか。

これらの話の底流をなしているものは、じめじめした陰惨な空気ではなく、もっと朗らかな調子のものであった。そして、こうした背景は、霊異記の話にもあてはまることのようである。言ってみれば、僧がすべての持物を捨てゝ入山したのも死に行く身には不用だったからではなく、心は救いに充ち充ちた彼岸を飛翔していたからではなかったか。換言すれば、僧の行為はどれも意図的なものであったということである。その旅立は、否定へむかってのものではなく、行脚のため、この海辺の地にやって来た時と同様、いっそう深く仏界へ帰依してのものであった。僧は、凡俗の到達しがたい理想の体験者でさえあり、それゆえに、幾多の人の心の代弁者である僧の話は尊ばれ語り伝えられたのであった。

斯く推定することが許されるなら、次に、この意図的なものの一つの方向として、こうした心情の所産ともいえる入定ミイラの歴史をこゝに想定してみたい。

3

我が国には、十二世紀以後の十八体のミイラが現存しているが、奈良県多武峯で長保五年（一〇〇三）六月九日に八十七才で死んだ増賀聖が、文献にみえる八定ミイラの最古の例であり、（「日本のミイラ」安藤更生氏説 毎日新聞社）左がその記事である。

師名増賀。世称多武峰先徳——中略——一日集門弟子曰。西方佳期。今其不遠。即設講筵。演説深義。又命侍僧。将碁局鞠泥二物来。便就局手談。被鞠奏胡蝶。（舞曲名）。仁賀問其故。師曰。我少時嗜此二事。然為人諫止。余習難除。動輙発念。一毛繋着。万劫苦因。故今作之。以消遣而已。然後令弟子念仏。自入静室。坐縄床誦法華。誦罷俄曰。聖衆来也。乃吟辞世和歌。結金剛印。泊然而滅。年八十七。実長保五年六月九日也。——中略——

只須窆埋。三年之後。開壙視之。諸徒作大桶。殯于寺後。々三年十一月。門人春秀等開壙。跏趺儼然。全体不壊。爪髪倶長。但衣已朽弊。秀等乃葬于寺之西北塢。其後垂二百年。文治三年十月念日。沙門徳行。珍与。高築方壇。上建霊塔。又創塔院。扁紫蓋寺。自爾以来。僧侶漸集。坊宇益多。以為談山之末院——下略——

（和州多武峰増賀上人行業記）続群書類従八輯伝部

増賀聖は奇行があって有名な人だが、死ぬにあたって、「自分が死んでも火葬はするな。穴を掘って埋め。三年たったら開けてみるがよい」。そこで弟子たちは大きな桶をつくってその中に遺骸を入れ、寺のうしろに葬った。三年たって十一月に、門人の春秀が塚穴を開けてみたところちゃんと坐禅を組んで坐し、体は完全で、爪や髪が延びていたが、着物だけは腐っていた。

また、阿闍梨維範について伝えるところによれば、

阿闍梨維範者。京師人也。頭密禀性。山林摂心。遂辞平城之月。長入高野之雲。俗呼曰南院阿闍梨。自爾以降。偏厭下界。専望西土。嘉保三年正月廿八日。俄有小労。送両三日。至二月朔日。法華経一部。不動尊一万躰。摺模供養矣。——中略——一期之命。今

夕極也。奉見曼荼羅。亦此時許云々。即帰本房。端坐向西。手結妙観察智定印。口唱弥如来宝号。兼以五色糸。繋于仏手。与定印相接。漸及子尅。如眠気絶。其第五日。歛送廟室。旬日之間。門人往視。容顔不変。定印無乱。鬢髪少生。鼻気更無。因茲縮素集門。結縁成市。至五七日。門弟相議。開見廟戸。定印容色猶以如故。畏此奇異。鑠廟不開。凡闍梨臨終之間。端相太多。――下略――

（拾遺往生伝）

これから、維範は、死後十日を経ても、顔色は変らず、鬢髪は少し延び、死臭は全くなく、噂を聞いた僧たちが拝みに来て門前市をなした。再び、五七日経ってから、門弟たちが相議して廟の戸をあけてみたが様子はもと通りで少しも変らない。それ以来廟の戸を閉ざして開けないことにした。

これらの話には、ミイラに対する意識化と、礼拝が既にあったことを語るものであろう。増賀聖の弟子に仁賀という人がいたが、それには次の記載がある。

砂門（沙カ）仁賀者。大和国人也。住二多武峯一。以二増賀一為レ師。本是興福寺英才。深恐二後世一。全弃二名聞一。或称レ嫁二寡婦一。或称レ有二狂病一。不レ随二寺役一。一生念仏。最後不レ乱。弟子等依二其遺言一。居二於棺中一。瘞二於垣下一。身体不二爛壊一。

（続本朝往生伝）

こゝで爛壊せずといっているのは、後拾遺往生伝に出てくる願西が、「もし体が腐爛しなければ往生した証拠じゃ」と息子に遺言し、その通りであったという記述に通うもので、人々から尊ばれる存在である証拠であった。

更に、弘法大師は、今猶生きていて諸国を行脚しているという話がかなり大きく伝えられているのは、弘法大師は、高野山の奥の院でミイラになって入定（五十六億七千万年後に弥勒菩薩がこの世に現われ衆生を救うのを待っている）しているという信仰が生みだしたものであろう。大師については次の記載がある。

弘法大師――中略――入金剛定。于今存焉。初人皆見鬢髪常生。形容不変。穿山頂。入底半里許。為禅定之室。彼山于今無鳥鳶之類誼譁之獣。兼生前久誓願也。――下略――

（本朝神仙伝）

この記述で、「今も存する」とあるのは、祀られて在ったのであり、これに接する人々にとっては、生きたまゝの大師に接見するようにいつも見えたのであった。今昔物語集巻十三「長楽寺僧、於山見入定尼語第十二」は女の入定の例であり、心の迷いから念いを遂

げられなかった女人の怨み語りである。このように、女でさえ入定を志すことはできた。背後には入定を志す男の群はいかばかりであったろう。

再び、安藤更生氏説によれば、入定ミイラを希望するものは「老年期に入ってからであるが、一千日、二千日、三千日などの穀断ちをする。五穀断ちから十穀断ち、いよいよ最後の段階では水以外のすべてを断つ。こうして結跏趺坐や合掌の形を整え、土の中へ三年入れておく。（まだ命があるうちは穴の中から鐘を叩く音にまじって経をとなえる声が聞えてくる。三年経ってミイラは埋り出され、本物に仕立てあげられ堂にまつられる）」（前掲書三〇頁以上取意（　）印は筆者）という。氏は、この解説にあたってはいちいち資料を掲示されているわけではなく、殊に後半の（　）印で示した部分は、氏が言われているように、今日地方に残っている入定者にまつわる民間伝承なのであるが、管見に入った高僧伝、往生伝類の記述から推して氏説は当を得たものといえよう。殊に後半の伝承と合わせて私の興味をひいたものに、拾遺往生伝の左の記事があるが、

大僧都定照者。興福寺惣官東寺長者也。――中略――告弟子曰。我屍骸忽焼尽。雖為骸骨。可誦法花。言語巳畢。端坐入滅。于時永観二年甲申。春秋七十三。其誓願力故。于今墓中有読経之声。又有振鈴之音。（続群書類従所引）

こゝで、定照僧都が、骸骨となってからも法花経を誦するという誓願の通りに、今でも墓中で読経の声がし、鈴を振る音が聞こえるといっていることに注目したい。支那では、古来、骸骨は、ミイラをも意味したのであるし、この資料などは、氏の後半の、今猶、地方に残っている伝説の裏付けとなるものではなかろうか。こうしたことが言えるとするならば、「春雨物語」の乾鮭のように干からびた男が返き返ったような事件も、当時では、さしてめずらしいこともなかったのだろう。贅言に過ぎるかもしれないが、次の記事なども、入定の僧の打ちならす鐘の音の不思議話であり、同種のものとも言えよう。

斎鄴下大荘厳寺釈円通伝

（〇略）今石窟寺僧。毎聞㆓異鐘唄響洞㆒発山林㆒。故知神宮仙寺不㆑無㆓其実㆒。余往㆓相部㆒尋㆓鼓山㆒焉。在㆓故鄴之西北㆒也。望㆓見横石㆒状若㆓鼓形㆒。俗諺云。石鼓若鳴。則方隅不㆑静。隋末屢聞㆓其声㆒。四海沸騰。斯固非㆑妄。左思魏都云。（十賦イ）神鉦迢㆓遞於高巒㆒。（イ遰）霊響時警㆓於四表㆒是也。自㆓神武遷㆑鄴之後㆒。因山上下並建㆓伽藍㆒。或樵採陵夷工匠窮鑿。（或十十一イ）神人厭㆓其誼擾㆒。捐捨者多。故近代登臨穿㆑逢㆓霊跡㆒。而伝

説竹林。往往殊異。良由業有精浮。故感見多矣。(彩イ)近有従鼓山東面(西イ)而上。遥見丙山巓大道。列乙樹青松甲。尋路達宮。綺華難紀。(給イ)珍木美女相次歎娯。問其丈夫。皆云適往少室逼暮当還。更進数里。並是竹林。尋径西行(行イ)乃得其寺。衆僧見客。歓遇承迎供給食飲指其帰路。乃従山西北下。去武安県不過十数里也。暨周武平斎。例無別服(僧イ)。鄴東夏坊有給事郭弥者(・十郎イ)。謝病帰家養素閭巷。洽聞内外慈済在懐。先廃老僧悉通収養、宅居読誦。忽聞有摑門者。令婢看之。見一沙門執錫擎鉢。云貧道住鼓山竹林寺。逼時乞食。弥近門声接(妄イ)。乃遥応曰。衆僧但言乞食、何須詐聖。身自往観四尋不見。方知非常人也。悔以軽肆其口故致聖者潜焉。近武徳初年。介山抱腹厳有沙門慧休者。高潔僧也。独静修禅。忽見神僧三人在仏堂側。休怪之謂尋山僧也。入房取坐具。将往礼謁。及後往詣。神僧中小者抱函在前。大者在後乗虚再再(・・・三字は舟イ)南趣高嶺。白雲北迎雹靄(靄イ)不見。後経少時又見一僧東趣厳壁。休追作礼。遂入石中。此厳数有鐘鳴。依時而摑。雖蒙声相不及言令。斯亦感見参差不可一准。大略為言。厳穴霊異要惟虚静。必事喧雑希聞奇相矣。

(続高僧伝巻第二十五 大正蔵五〇 六四八頁)

次に、穀断ちについてであるが、管見に入った資料によれば、

(沙カ)砂門日円者。本天台之学徒。後発菩提心。隠身於厳谷。住於金峯山之三石窟。長断米穀。殆似神仙。後移—住於美作国真島山。当国隣国。欽仰如仏。為礼清涼山。附大宋商船渡海。後聞於彼朝天台山国清寺。入滅臨終之相。往生無疑。

(続本朝往生伝)

沙門蓮待者。丹波国人也。幼年出家。住仁和寺。師事叡算阿闍梨(本名永算)。壮年之時。道心忽発。隠居之後。改名蓮待。俗呼曰石蔵聖矣。日夜苦行。未会休息。又籠金峯山。断穀塩味。身躰巳枯。筋骨皆露。——中略——常誡門弟曰。吾臨終之時。不可葬殿。只置野原。可施鳥獣云々。或人曰。若然者爛骨狼籍。浄地汗穢者歟。上人歎曰。可然々々。——端座入滅。諸僧望見。両眼有涙。当于比時。西天雲聳。前林風惨。雲上有雷音。風下有舌気。須臾天晴。雲天所処。于時春秋八十六。——下略——

(拾遺往生伝)

右の続本朝往生伝における金峯山の石窟で長く米穀を断って修行する沙門日円は神仙のようであり、人々から仏のように欽仰され

た。また、拾遺往生伝における丹波の国の人、蓮待沙門は、金峯山に籠り、穀塩類を断ち修行する。あるいは、比良山の持経者寂仙人は、菩むす大松樹のもとに雨露をしのぎ、血完ことごとく枯れ、皮骨ばかりだったが、諸仏の感歎する仙僧であった。

葛河伽藍。有一沙門。断食苦行。懺悔修行。送於年月。夢有僧。告沙門。当知比良山峰。有一仙僧。誦法華経。諸仏所歎。諸天礼拝。汝当往詣。親近結縁。比丘驚夢。入比良山。逕歴数明推(持力)尋覓求。遥聞読誦大乗音声。——中略——苔敷篠生。量纜二丈。有一嵓洞。希有絶妙。有大松樹。根宿嵓上。枝葉四垂。——中略——有一聖人。血完都尽。但有皮骨。形貌奇異。著青苔衣。——中略——告比丘言。我是興福寺僧。法相宗学徒。号曰蓮寂。——中略——永去本寺。跡交山林。於治養身哀護命事。永生猒離。積功累徳。自作仙人。往還遊往山嶽峰谷。宿縁所追。来住比山。我離人間。猒世以後。法華為父母。——中略——比丘雖作随順之意。其性劣弱。不堪其器。悔恥自心。遂以還去。以仙人神力。日裏来至葛川伽藍。語伝同行善友。令植仏因矣。

（本朝法華験記上）

この話になるとどうも神仙思想くさいが、前述の数話を通じて、入定をめざす修行者の日々の営みは、成仙の道にも極似したものであったとも言えよう。

4

中国の入定ミイラの歴史は、高僧伝の記録から、最古の肉身仏は、晉の元康八年（二九八）に婁止山で端座して死んだ謌羅竭にはじまる。左の記事がそれである。

訶羅竭者。本樊(懋イ)陽人。少出家。誦経二百万言。性虚玄守戒節。善挙(措イ)厝美容色。多行頭陀独宿山野。晉武帝太康九年暫至洛陽。時疫疾甚流。死者相継。竭為呪治。十差八九。至恵帝元康元年。乃西入止婁至山石室中坐禅。此室去水既遠。時人欲為開澗。竭曰。不仮相労。乃自起以左脚蹍室西石壁。壁陥没指。既抜足水従中出。清香軟(濡イ)美四時不絶来飲者皆止飢渇除疾病。至元康八年（二九八）端坐従化。弟子依西国法(・欠字イ)闍維之。焚燎累日而屍猶坐火中水(永イ)不燼。乃移還石室内。後西域人竺定。字安世。晉咸和中往其国。親自観視屍(十見イ)儼然平坐已三十余年。定後至京伝之道俗。

一世紀ほど離れて河北の人・慧元、燉煌人・単道開がみられる。

（高僧伝巻第十　大正蔵五〇　三八九頁）

釈慧元。河北人。為レ人性喜慍無レ色。常習禅誦経。勤二化福事一以為二恒業一。晉太元初於二武陵平山一立レ寺。有二二十余僧一。殞蔬幽遁永絶二人途一。以二太元十四年一（三九八）卒。卒後有レ人入二武当山下一見レ之。神色甚暢。寄二語寺僧一勿レ使二寺業有レ廃。自レ是寺内常聞二空中応レ時有二磬声一。依而集レ衆未二嘗差失一。沙門竺慧直居レ之。直精苦有二戒節一。後絶レ粒唯餌二松柏一。因登レ山蟬蛻焉。

（高僧伝巻第十三　大正蔵五〇　四一〇頁）

単道開

単道開。姓孟。燉煌人。少懐二栖隠一。誦二経四十余万言一。絶レ穀餌二柏実一。柏実難レ得得復服二松脂一。後服二細石子一。一呑二数枚一数日一服。或時多少啖二薑椒一。如レ此七年。後不レ畏二寒暑一。冬温（・温イ）夏涼（・温イ）。昼夜不レ臥。与二同学十人一共契二服食一。十年之外或死或退（・始イ）。唯開全レ志。――中略――至二晉昇平三年（三五九）一。来之建業一。俄而至二南海一。後入二羅浮山一。独二処茅茨一蕭然物外一。春秋百余歳卒二于山舎一。勅二弟子一以レ屍置二石穴中一。弟子迺移二之石室一。有二康泓者一。昔在二北間一聞下開（・欠字イ）弟子叙中開昔在二山中一毎有二神仙一去来上。迺遥心敬挹。及二後従一役南海一。親与相見。側レ席鑽仰。稟開備至。迺為二之伝讃一曰

蕭哉若人　飄然絶レ塵　外軌二小乗一　内暢二空身一　玄象暉曜　高歩是臻　飡二茹芝英一　流二浪巖津一

晉興寧元年（三六三）陳郡袁宏為二南海太守一。与二弟顗叔及沙門支法防（友イ）一共登二羅浮山一。至二石室口一。見二開形骸一。及香火瓦器猶存一。宏曰。法師業行殊レ群正当レ如二蟬蛻一耳。迺為レ讃（賛イ）曰

物俊招奇　徳不二孤立一　遼遼幽人　望レ巖凱レ入　飄飄霊仙　玆焉遊集　遺屣在レ林　千載一襲

後沙門僧景道漸。並欲レ登二羅浮一。意不レ至レ頂。

（高僧伝巻第九　大正五〇　三八七頁）

あるいは、

釈法成。涼州人。十六出家学通二経律一。不レ餌二五穀一唯食二松脂一。隠二居巌穴一習禅為レ務。元嘉（四二四～四五三）中東海正懐素出守二巴西一。聞レ風遣迎(近イ)会二於涪城一。夏坐講レ律事意辞反。因停二広漢一復弘二禅法一。後小症便告レ衆云。成常誦二宝積経一。於レ是自力誦レ之。始得二半巻一。気劣不レ堪、乃令二人読レ之一遍纔(裁イ)竟合掌而卒、侍レ疾十余人咸見レ空中紺馬背負二金棺(箱イ)一升レ空而逝上

（高僧伝巻第十一　大正蔵五〇　三九九頁）

釈法悟(悟イ)。斉人。――中略――南至二武昌一履二行山水一。見二樊山之陽一可レ為二幽栖之処一。本隠士郭長翔所レ止。於レ是有レ意二終焉一。時武昌太守陳留阮晦。聞而奇レ之。因為剪レ逕開レ山造二立房室一。晤不レ食二粳米一常資二麦飯一。日一食而已。誦二大小品法華一。常六時行道――下略――。

（高僧伝巻第十一　大正蔵五〇　三九九頁）

大行禅師第十五

大行禅師斉州人也。入太山草衣木食(木衣イ)。求法華三昧。感普賢菩薩現身。教師念阿弥陀仏。経三七日。夜将半時。忽見瑠璃地。心眼洞明(・十見イ)十方仏。後疾右脇而終。葬後棺槨異香数日不散。儀貌如生都不異也。

（往生西方浄土端応伝　大正蔵五十一巻　一〇五頁）

懐玉禅師第十八

懐玉禅師姓高。台州湧泉寺居。一食不瞰家種(稼穡イ)。不衣絲蠶。常自業懺(撲イ)悔万万余反。誦弥陀観経三十万遍。日課仏名五万口。蚤虱放生。長坐不臥。天宝（七四七）六年六月九日。見西方聖象数若恒沙。見一人擎白銀台当窓而入。禅師曰。我之功課得金台。便加功念仏。空中告言。頂上円光。光明遍空。語門徒曰。退後莫交觸光。至臨終時。光色転盛。乃説偈曰(言イ)

清浄皎潔無塵垢　蓮華化生為父母　我修行来経十劫　出示閻浮受衆罪(苦イ)　一生苦行超十劫　永離娑婆帰浄土

説偈已見紫金台含笑而終。肉身現在台州湧泉寺。

（往生西方浄土端応伝　大正蔵五十一　一〇六頁）

釈道積。蜀人。住二益州福成（感イ）寺一。誦二通涅槃一生常恒業。――中略――以二貞観初年五月一終二于住寺一。春秋七十余矣。時属二炎夏一而不二腐臭一。経停百日跏坐如レ初。莫レ不二嗟尚一。乃就加二漆布一――下略――。

（続高僧伝巻第二十八　大正蔵五〇　六八八頁）

漢杭州耳相院行修伝

釈行脩。俗姓陳。泉州人也。少投二北巌院一出家。小レ心受レ課誦念克勤。――中略――以二乾祐三年（九五〇）庚戌歳十一月一示レ疾。動用如二平時一。以二三月中夜一坐終。檀越弟子以漆布。今亦存焉後寄二夢睦州刺史陳栄一曰。吾坐下未レ完。検レ之元不二漆布一。重加レ工焉。

（宋高僧伝巻第三十　大正蔵五〇　八九九頁）

左の諸話の主人公はいずれも、穀粒を断ち、松柏を餌とし、単道開などは、石粉を服んだり、薑椒を噛んでいた。また、懐玉禅師の肉身は現在猶、台州の湧泉寺にある。穀断ちをし、入定ミイラの各条件を備えたうえ入滅した人々は、少しく時代がくだると、弟子等により、形が整えられ、漆布をほどこされたりして、完全なミイラとして祀られるようになる。左の二つの記事などはそれであろう。弘賛法華伝の話なども、自然にミイラになった例――単なる霊異譚の域にとどまるもの――可成り作意的なもの（慧向などの話）などの違いはあり、これらについては既述の通りであるが、明らかなことは、人々がこの奇蹟的な出来事に礼拝し、崇拝にも似た気持をよせていることである。

立ち返って、霊異記の、「今は罷り退きて山に居り、伊勢の国に踰（コ）えむと欲ふ」の部分の意味がはっきりしないのであるが、今昔物語集では、我レ比ノ所ヲ罷（マカリ）退（シリゾキ）テ、山ヲ超（コエ）テ伊勢（イセ）ノ国ニ行（ユカ）ムト思フ」とある。結論めいた言いかたをすれば、霊異記の禅師も、修行のために入山したのであり、穀断ちの行をしたとみることも可能であろう。穀断ちといえば。「今昔物語集」（巻六ノ二四）及び「宇治拾遺物語」（巻十二ノ九）の「穀断聖露顕事」があり、これは、恐らくは、文徳実録、斉衡元年（八五四）七月廿二日の条の記事が説話化されて伝承されたのだろうと言われているが、

備前国貢二一伊蒲塞一。断穀不レ食。有レ勅、安二置神泉苑一。男女雲会、観者架レ肩、市里為レ之空。数日之間遍二於天下一。呼為二聖人一。各々二私願一。伊蒲塞仍有二許諾一。婦人之類、莫レ不二眩惑奔咽一。後月余日、或云、伊蒲塞夜人定後、以レ水飲二送数升米一、天暁如レ厠。有レ人窺レ之、米糞如レ積。由レ是声価応レ時減折。児婦猶謂二之米糞上人一。

（乞イ）

この話になると、三面記事的な興味が大きくはたらきかけているにせよ．そこにみられるものは歴史の上に刻まれている信仰の力である。この記録を、このまゝ認めるとするならば、当時、すでに穀を断ち、修行にはげむ僧はこのように尊崇の的であったということになる。世俗を避けて入山した僧の話は枚挙にいとまのないほどである。修行の途路不慮の死を遂げ、死後も屍骸が法華経を読みつゞけたという今昔物語集巻第十三第十一話、あるいは、「往生伝」類の伝えるこの種の話は数多みられる。左の記事が例である。

善仲善算両上人。——中略——或時同心対師修行寄レ言。遂求二避名之地一。而縮入二勝尾之山一。経行之場。苔蘚纔分。坐禅之床。鳥獣相馴。常願曰。以レ此依二身往生浄土一。而問。神護景雲二年甍二月十五日未刻。善仲上人乗二於草座一高飛西去。生年六十一。其後善算上人無言坐禅。同三年七月十五日酉尅。又冲天西没。生年六十二。

（拾遺往生伝）

沙門広清者。叡山千手院住僧也。常悔二前業一。専祈二後世一。被レ引二事縁一。雖レ廻二世路一。心在二山林一。口二誦法花一。夢有二八菩薩一。身色皆黄金。其一**芥**告二沙門一云。一心不レ退。修行妙法。我等八人当送二極楽一。言訖而去。夢覚歓喜。弥亦加行。乃至臨レ終。誦経気絶矣。於二其墓所一。毎夜有二誦レ経音一。已迎二五更一。必誦二一部一。有二一弟子一。取二其髑髏一。置二清涼山一。於二其山中一。猶誦二法華一云々。

（拾遺往生伝）

因幡国有二一武士一。出家住二山寺一。住僧念仏。及二於老後一受レ病。病増力減。追二出女子一。唯留二男子一。扶レ病而起。向レ西念仏。其音響二山谷一。百遍許之後。漸気絶。音止之後。其舌猶動。如レ初不異。乍レ坐入滅云云。

（後拾遺往生伝）

こうした、往生伝類の系列に霊異記の話は属するものであることは、まず、まちがいのないところであろう。そして、この類の話は、日本に於ては、限られた範囲——高僧伝、往生伝などの——にしか根をおろさなかったこと、——それは、彼地についても同様の

ことが言えそうであるが――、仏教の、殊に法華信仰の支配する世界に咲いた一つの花であった。法華信仰に篤いものは六根懐ちずといゝならわされているが、なかでも特に、〈舌〉にまつわる話が圧倒的多数を占めているのは、西紀前二〇〇～一〇〇年の頃インドに起った、ミーマーンサー学派の言語不滅説にもかよう思想の所産でもあろうか。霊異記の某禅師の死自体は、不慮の死であったかもしれない。少くとも彼は、釈慧向のように成仏するにあたって、恵まれた環境をもちあわせてはいなかったようだ。が、その死を受けとめる周囲の眼のなかには、奇蹟への驚きと賛嘆のかげには、単に入定者へよせる崇拝の念だけではなく、すでに、かすかにではあるが、入定ミイラへよせる意識化の胎動がみられるものではなかろうか。

5

それでは、このような風習は、何時頃我が国に起ったのかというと詳しいことは解らない。仏教の伝来とともに入ってきたものであるには違いないが、霊異記の編纂当時に既にこのような風習があったかどうか、また、筆録者、景戒が、先きに引用した類の、外来経典をどこまで駆使していたものかも知るよしもない。が、こうしたことは言える。

唐僧恵祥撰の弘賛法華伝は、支那で何時成ったかは明らかでないが、東大寺本の奥書によれば、

弘賛法華伝者、始レ自二東晉一終二乎李唐一、凡学二法花一得二其霊応一者、備載二於此一、斯可レ謂下裨二賛一大事之因縁一、使二其不下墜二于地一者上歟、今海東唯得二草本一、年祀逾遠、筆誤頗多、鑽仰之徒病二其訛升(舛カ)一、余雖二不敏一、儻二校是非一、欲二広流通一、因以雕レ板、庶幾披閲之士、開二示悟一入仏之知見一者也

時天慶五年歳在乙未季春月十七日　於内帝釈院明慶殿記

とあり改丁して、

大日本国保安元年七月八日、於太宰府勤俊源法師書写畢、宋人蘇景、自高麗国奉渡聖教之中、有此法華伝、仍為留(多イ)両本所令書写也

半僧覚樹(羊ナルベシ)記文

とある。また弘賛法華伝に左の記載がある。

弘贊法華伝者。宋人永蘇景。依予之勤。且自二高麗国一所二奉渡一聖教百余巻内也。依二一本一書。為レ恐二散失一勤二俊源法師一。先乞書二写一本一矣。就中蘇景等帰朝之間。於二壹岐島一。遇二海賊乱起一。此伝上五巻入二海中一少湿損。雖レ然海賊等。或為二宋人一被二殺害一。或及レ島被二溺死一。敢見散失物。宋人等云。偏依二聖教之威力一也云云保安元年七月五日。於二太宰府一記レ之。大法師覚樹。

（弘贊法華伝巻第五巻末）

右の記述から、天慶五年（一一一五）に朝鮮で書写された一本が、宋人蘇景によって高麗より太宰府へもたらされ、我が国、保安元年（一一二〇）に書写し畢った経巻であることが解る。また、弘贊法華伝からの引用が、全百七条の説話のうち、七十五条を占める高麗僧了円撰の「法華霊験伝」の第十六段「深敬二弁山人之精書一」の条は、倭国の僧が、彼地から法華経を伝え、博多の崇福寺に安置したとあるのは、我が国への法華経伝来を伝える記述として注目すべきものであろう。また、弘贊法華伝のなかの「釈慧顗」の話は、「三国遺事」（僧一然撰（一二〇六―一二八八）――「三国史紀」と並んで朝鮮古代の遺事選集――巻五に「恵現求静」として在る。同じく、「史呵誓」は、我が国に伝来し、平安朝初期の書写本を残す義寂撰「法華経集験記」[註3]の上巻・諷誦に引かれ、唐僧恵祥撰「法華伝記」[註4]巻五にも散見する。また、「釈志湛」は「法苑珠林」巻第八十五感応縁にもある。繁雑の感があるが、ついでに述べれば、先きの「法華経集験記」には、六朝の「観世音応験記」[註5]から一話――「百済人」――を上巻「諷誦」に引き、また、「法華霊験伝」の下巻に普朝謝敷観音伝から八条を引いており、支那では夙に佚書となっている「観世音応験記」は、何時の頃か我が国に伝わり、今日、鎌倉時代の書写本を伝えている。また、話が前後するが、「法華経集験記」には、弘贊法華伝に納められている前述の「釈志湛」（出典集神州三宝感通録大正蔵五二巻）及び、「斉文成」（出典集神州三宝感通録）、「史呵誓」（出典集神州三宝感通録）などの話などの話を納めている。

注目すべきは、このように、この種の話に関する夥しい文献が我が国に渡来していたことである。こうしたことから、風習及び、今日では既に散佚してしまった文献などを通して流入した大陸の思潮は、思いもよらぬ早い時期にまで遡って考え得られるのではなかろうか。

註1　両本とも原文は掲示していないが、「後魏茫陽五候寺僧」「斎武陵世并東看山人」をさすものであろう。

註2　「斎文成世」の話で、これは「集神州三宝感通録」からの引用として「法華経集験記」にも引かれているが、校合の結果、今昔物語集の記事は、「三宝感応要略録」系統のものによったものと思われる。

註3　東京大学付属図書館蔵本（一軸、A00/4273）で去る昭和三十三年十一月同大学同図書館史料展、貴重書展示会で公開されたものの一つである。筆者は、同史料編纂所・太田晶二郎氏の御厚意により書写を許されたものである。

巻下の首に「沙門寂撰とあり、（東域伝燈目録、法華部に『法華験記三巻寂（マヽ）』とみえるのがこれであり、唐代の編述であろうが冥報記、集神集三宝感通録を引いていてそれ以後の成立にかゝるものであろう。

奥書に

嘉応二年庚寅二月十八日伝得之

釈子有慶（花押）

とあるが、書写ははるかに古く平安朝初期のものと思われる」と太田晶二郎氏は説かれている。全巻を通じて撰者が出典として挙げているものに「集神州三宝感通録　十七話」「東夏三宝感動録　四話」「冥報記　五話」「金剛般若経霊験記　一話」「金剛般若経集験記　一話」「観世音応験記一話」「要集（諸経要集カ）一話」「出典不明　二話」

猶、義寂が、これらのものから直接引用したのか、他本からの間接的引用であるかどうかは今は触れない。

義寂については、

台宗第十五祖也姓胡氏字常照温之永嘉人年十九祝髪具戒乃造天台学止観於竦法師其所領解猶河南一編照也自安史挺乱会昌焚毀天台教迹多在海外師白呉越忠懿王遣使日本国求取教典故教学復興実師之力也賜号浄光法師太平興国中卒寿六十九平生所講三大部各二十編維摩光明梵網金剛錍法界観等各数編述義例不二門等科節数巻見宋僧伝第七巻及釈門正統第一巻仏祖統紀第八巻稽古略第四巻六学僧伝第八巻仏祖綱目第三十五巻法華持験下巻（大日本仏教全書　僧伝排韻巻五十九）

との記事がみられるが、この書写本は少くとも平安朝初期のものであることから、これは同名異人の義寂なのであろう。

更に、順治十六年頃世に出たとされる法華経持験記（大日本続蔵経所収）に、法華経集験記全三十八話（そのうち目次のみ本文のないもの六話、題名と本文が全く異るもの三話）の半数に近い十四話が収められている。形としては簡略化され、文学的色彩には乏しいものとなっているが、当時数多く編まれた仏教霊験譚が、幾世紀もの昔からどのような変容、展開を示したかは、我が国の説話の流れを考えるうえに興味深い問題であろう。

註4　唐僧祥公撰。一般に行われている伝本は慶長五年版であるが、東大寺に古写本あり、表紙左下に「沙門釈宗性」とあり本書が今昔物語時代に読まれたことは片寄正義氏によって説かれているところである（今昔物語集の研究）。

撰者祥公については高僧伝類にも見当らず詳しいことは解らないが、巻末の記述によれば、本書は法華経に関する霊験譚を集めたものであり、そ

の多くは出典を記しているのである。本書の我国渡来年代は明らかでない。東域伝燈目録にもみえない。

註5　永徽四年（六五一）頃唐臨の作とせられている冥報記の序に

昔晉高士謝敷宋尚書令伝高太子中書舍人張演齊司徒従事中郎陸果（果）或一時令望或当代名家並録観世音応験記――下略――

また、隋の天台宗祖智顗（五三八－五九七）が「観音義疏」（大正蔵三四）

晉世謝敷作観世音応験伝斎陸果（果）又続之其伝云――下略――

同時代の三論宗祖吉蔵（五四九－六二三）の「法華義疏」（大正蔵三四）

応験記非一会稽高士謝敦（敷）字慶緒呉郡長暈（張景玄）玄陸璒（果）等並撰観音験記――下略――

などの記事からその存在は知られていたが、支那でも日本でも夙に逸書とせられ原本は見られぬものとされていた。ところが昭和二九年、塚本善隆博士により京都青蓮院の吉水蔵から、

繋観世音応験　并伝張二記　在前念三家

斎司徒従事中郎呉郡陸果字明霞撰

と題する古鈔本が発見された（本書に対する詳しい解説は、塚本善隆博士によって――「古逸六朝観世音応験記の出現――晉謝敷　宋伝亮の光世音応験記」（京都大学人文科学研究創立二十五周年記念論文集）「歴史語言研究所集刊十七」「文化十九ノ一　唐代特集号）――なされているところであるが、中国に於ける観音霊験説話集は、第四世紀の後半、晉の謝敷（字、慶緒）によって十余事が集められ、後、三九九年孫恩の乱で散佚。乱後、伝瑗の子、亮（字・季友）が記憶していた七説話を記し「光世音応験記」が成った。次で、斎の張演（字・景玄）が十条の説話を集めて伝亮の応験記に続く「続高世音応験記」を選し、更に斉の陸果（字・明霞）は中興元年（五〇一）六十九条の応験記を集めて「繋観世音応験記」を撰し、前二書を合わせ、三書を一つにして、六朝の観音応験説話八十二条を集めた書を世に出した。猶青蓮院鈔本の終には、百済の応験事例二条が加えられているが、その一つの『貞観十三年百済武広王』の話は、唐の貞観十三年より少くとも尚若干年以後に加えられたものであり、このことは、今は、中国で逸書とせられている本書が盛唐頃には尚存在したこと、青蓮院本は唐以後の本によったものであることを推知せしめるのである」（前掲書）

また、「有百済人」の話は、義寂撰、「法華経集験記」にも出典を明記して引用されている。